

2014年度大学共同研究 研究成果概要

所属・職・氏名：文学部・教授・高岡 裕之

研究課題：愛新覚羅溥傑関係資料の総合的研究—福永燐生氏所蔵資料を中心として—

研究期間：2014年4月1日～2015年3月31日（第2年度）

研究成果概要

本研究は、2013年度に本学が受贈した「愛新覚羅溥傑家資料」を、博物館において保存・活用するための基礎的研究である。

本研究には、大別して4つの課題がある。第1は、「愛新覚羅溥傑家資料」の全体像を確定する作業である。同資料に含まれる写真や書簡の資料情報は、もっぱら福永氏の記憶として存在しており、同資料を受け入れる際には、福永氏にヒアリングを行い、それらをデータ化する必要がある。またその際には、個々の資料にまつわる歴史的事情を調査した上で、福永氏の証言と突き合わせ、検証するという作業が必要となる。上述のように同資料の範囲は、日中双方にまたがり、時期的にはほぼ一世紀におよぶ。またもともと福永氏が所蔵していた資料の一部は、山口県下関市の中山神社に奉納されており、その調査が必要である。

第2は、「愛新覚羅溥傑家資料」の学術的価値を探ることである。本資料はこれまでもさまざまな形で用いられ、広く知られてきたが、愛新覚羅家そのものに光をあてた学術的研究は意外なまでに少ない。これは戦後における日中双方の近現代史研究において、「満洲国」が否定されるべき存在として扱われてきたことと無関係ではないと思われる。しかし20世紀の東アジア史は、近年ようやくイデオロギー的制約から解き放たれ、本格的な歴史学的研究の対象となりつつある。このような状況を踏まえ、本研究では「愛新覚羅溥傑家資料」の持つ、歴史学的重要性について検討する。

第3は、博物館資料としての「愛新覚羅溥傑家資料」の特性に関する研究である。上述のように、同資料には写真、原稿、書、書簡、書籍等多様な形態のものが含まれているだけでなく、高度にプライバシーに関わる資料が少なくない。こうした資料群を博物館として、いかに分類・保存・公開すべきかについては、慎重に検討する必要がある。

第4は、「愛新覚羅溥傑家資料」の撮影とデジタル資料化である。この作業は、上記の作業を円滑に行う上でも、また将来における資料の公開に向けた準備作業としても、必須のものである。

本研究においては、これらの課題のうち、第1・第2の課題については、日本近現代史を専攻する高岡裕之（文学部）が中心となり、現代中国の政治外交を専門とする三宅康之（国際学部）の協力を得ながら進める。第3・第4の課題については、博物館開設準備室長である河上繁樹（文学部）が担当する。

最終年度である 2014 年度は、以上の課題を有する本共同研究の成果を、2014 年 9 月に開館した本学博物館の企画展示「愛新覚羅家の人びと—相依為命—」（2015 年 5 月 18 日～7 月 18 日）に結実させるべく努力した。その意味で、この企画展示は、本共同研究の成果を集約したものであった。

この企画展示の概要は、その展示図録に示されている。その主要目次は以下の通りである。

- ・河上繁雄（大学博物館長）「愛新覚羅溥傑家関係資料の受贈について」
- ・高岡裕之（文学部教授）「愛新覚羅溥傑と嵯峨浩の結婚—その歴史的背景—」
- ・木場貴俊（博物館学芸アシスタント）「資料紹介『慧生育児日記』」
- ・三宅康之（国際学部教授）「文化大革命・日中国光正常化」

もちろん、展示図録の中心をなすのは、出展された写真・書簡等の図版とその解説であり、本年度の研究の多くは、これら展示品の選定と、資料の解説を含む資料解説の準備にあてられた。その具体的な成果については、別添の展示図録を参照していただきたい。